

2023年5月1日に「一般社団法人マンガアーカイブ機構 (MAC)」が設立された。戦後マンガ史を築いてきた作家たちの高齢化、国内外におけるマンガの価値の高騰化、地震をはじめとする自然災害対策など、マンガの原画や雑誌、単行本のアーカイブを拡充することは喫緊の課題であり、このニュースは業界内だけでなく世間でも注目を集めた。

と、他人事のように書いているが、私自身、同法人の設立時社員であり、現在は業務執行理事を務めている。そこで、同法人が設立された背景や目的、活動内容などの詳細については機構のホームページをご参照いただくと、ここでは、私が関与している理由も含め、京都精華大学国際マンガ研究センター (IMRC) と MAC の関係について紹介しつつ、今後の展望に触れることとしたい。

2023年現在、京都国際マンガミュージアム (MM) では約30万点の関連資料を所蔵しているが、2006年の開館当初は約20万点からスタートした。つまり単純計算では17年間で資料が10万点増えたように見えるが、事はそう簡単ではない。というのも、実は開館から10年も経たないうちに30万点に達していたのだが、館内の収蔵キャパシティもほぼ満杯だったことに加え、増加した資料の大半が外部からの寄贈によるものだったため、開館前にIMRCが立案した収集方針通りにはなかなかコントロールできず、しばらく対処療法的な措置を続けてきたのが実態だったからである。

具体的な処方としては、ある時期より寄贈の受付を原則止めたり、国内外の関連施設からのニーズに応じて再寄贈したりと、個別に対応してきたわけだが、潮目が変わったのが、2010年度から始まった文化庁のメディア芸術に関する連携推進事業への参画だった。この事業の趣旨は、マンガ/アニメ/ゲーム/メディアアートの4分野における、資料のアーカイブと関連団体のネットワーク構築、専門人材の育成であり、まさにIMRCの活動方針やMMの蔵書実態からしてうってつけの内容であった。

だが、これまた事はそう簡単には進まなかった。事業開始直前の2009年に当時の政府がメディア芸術に関するナショナルセンター構想を掲げた際、「国営マンガ喫茶」や「アニメの殿堂」といった批判が出たことを覚えている方も少なくないだろう。そうした世論をふまえながらスタートした諸活動では、事業内容と予算項目を慎重に検討し、具体的かつ体系的な実践に注力し、毎年度の成果や課題を地道に公開し続けてきた(要約するところだが、実際にはここに書き切れないほどいろんなことがあった)。

結果的に、1期5カ年の計画で進行してきたこの文化庁事業は、2023年で第3期4年目を迎えたことになるが、私たちが参画したマンガ分野では紆余曲折ありながらも、国内初のマンガのアーカイブに関する相談窓口として、2020年に「マンガ原画アーカイブセンター (MGAC)」を、2023年には「マンガ刊本アーカイブ

センター(MPAC)を開設するなど、着実な成果を積み上げることができた。この場で文化庁をはじめとする関係者各位には厚くお礼を申し上げたい。

各センターの詳細については別に譲るが、強調しておきたいのが、この間の文化庁事業を通じ、マンガ家の先生方ならびに出版社と私たちのような研究機関やマンガ関連施設との相互理解、そして信頼関係が着実に深まったという点である。これこそ最大の成果といっても過言ではない。なぜならその流れが、冒頭のMAC設立に繋がったからである。

現在、MACの活動費の大半は「コミック出版社の会」に加盟する出版社からの賛助会費を原資としている。賛助する大きな理由として、これまで共に歩んできたマンガ家の先生方への恩返しがあると関係者から伺ったが、そこには当然ながら、MACに対する期待とその実行者、すなわち私たちの責任が伴うことになる。実際、IMRCでも2024年よりMACの京都での活動を担当する予定であり、次の年次報告書ではその様子も伝えられるだろう。

正直なところ、IMRCとしても私自身としても、その期待と重責に応えるにはまだ力不足の面があることは否めない。ただし、それ以上にやりがいを感じている。個人的な思い出になるが、MM開館当初にとある出版関係者から「人の禪で相撲を取るような施設ではないのか」と質問されたことがある。一口に「ミュージアム」といっても、過去の資料ではなく市場に流通する現役のマンガ=商品を扱うのだから、日々出版に専心されている立場からそうした疑問が生じるのも当然だった。この時のやりとりはずっと私の頭から離れず、IMRCやMMの活動方針に今でもところどころ反映されている。

あれから17年、出版社からのご理解とご支援を得ながらマンガのアーカイブを推進する好機に恵まれた。横文字の略称ばかりで紛らわしくて恐縮だが、マンガ業界にとって、MAC/MGAC/MPACにとって、そしてIMRC/MMにとって、より良い事業を展開するためには、それぞれの目的や役割分担を可視化する仕組みや関連動向を俯瞰できる地図も必要となろう。例えばIMRCでは、MACと連携しながらMMにとってのベスト30万点の蔵書をどのように構築していくかといった、具体的な計画や方法も検討しなければならない。

ああ、やりたいこと、やるべきことはこれからも山積みだ。

そんなことを考え続けた2023年だった。

2024年3月1日

#### 付記

2024年度は文化庁事業の第3期最終年度にあたる。引き続き、中長期的な展望と目下の課題を両にらみしつつ、IMRCの進むべき道筋を模索していきたい。

そうしたことを考えていた矢先、2024年元旦の能登半島地震により甚大な被害が生じ、マンガに関しては輪島市の永井豪記念館が焼失するという事態も起きた。

被災者の皆様には心よりお悔やみとお見舞いを申し上げます。あれから2カ月が経過しましたが、一日も早い復興を祈念いたしますとともに、全国のマンガ関連施設や自治体との連携を通じ、微力ながら私たちにできることに取り組みます。